

読書の行為としての書写

—紀州家旧蔵伝阿仏尼等筆源氏物語からの考察—

成 田 大 知

一 緒言

河内本系・青表紙本系の何れにも属さない、第三系列中に分類せらるべき古写本、

〔山岸徳平』河内名家源氏物語開題〕
〔徳川黎明会、一九三五〕

『源氏物語』の伝本のうち、青表紙本、河内本のいずれの本文系統にも属さない孤立した伝本を、池田亀鑑（一八九六—一九五六）以来、便宜「別本」と呼称している。しかし、

鎌倉時代の中ごろ、当時の学者や文人達が分担して書いたもので、非常にめづらしい系統のものであった。

一様に「別本」とは言い、その中には、青表紙本、河内本成立以前の古い本文を伝えている伝本も存するとされている。

（池田亀鑑「本のゆくへ」、『花を折る』
〔中央公論社、一九五九〕所収）

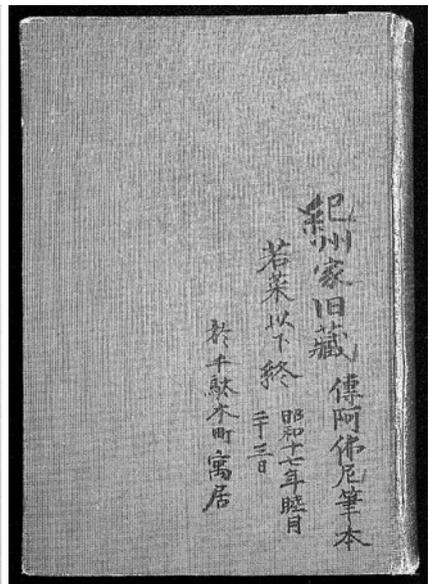
「別本」においては、青表紙本、河内本には見えない特異な本文に接することが少なくない。中でも紀州徳川家旧蔵伝阿仏尼等筆本、言わゆる紀州家本は、珍しい本文を有する『源氏物語』として知られていた。

「河内本系・青表紙本系の何れにも属さない」「非常にめづらしい系統」の本文を有するとされた紀州家本であったが、その原本は、先の大戦の戦禍に巻き込まれて焼失した蓋然性が高く、今に伝わらない。ただ、紀州家本全巻の本文を、当

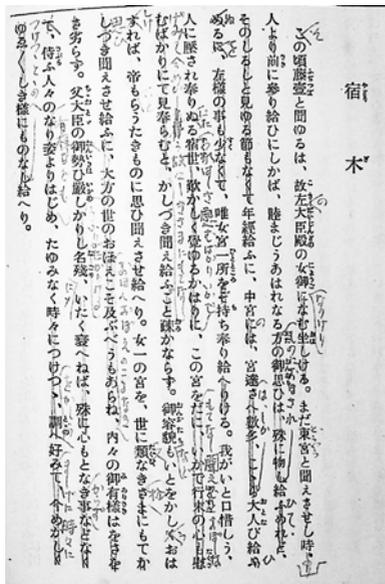
時印行されていた『源氏物語』の注釈書に書入れた校本が作成されていた。すなわち、武田祐吉（二八八六一一九五八）による「武田校本」と、その転写本で、山岸徳平（一八九三—一九八七）の周辺人物による「山岸校本」である。⁽¹⁾しかし、これら二本も現在散佚しており、紀州家本がどのような本文であったのかは、武田祐吉や山岸徳平の周辺人物の著書や論文に引用された部分的な本文でしか窺い知るほかなかった。

ところが近年、「山岸校本」の転写本で、若菜上巻〜夢浮橋巻までの紀州家本の本文が書入れられた校本を新たに見出した。沼波守校註『^(註)日本文学大系 第七卷 源氏物語』下巻（誠文堂新光社、一九三七）に書入れられているため、仮にこれを「^(註)日本文学大系校本」と呼ぶ。該本によって、紀州家本若菜上巻から夢浮橋巻までの本文と、「武田校本」「山岸校本」の製作の経緯が明らかとなった。該本の詳細については、拙稿「紀州家旧蔵伝阿仏尼等筆源氏物語本文の新考察―新出『^(註)日本文学大系校本』管見―」（『国語国文』九二—五（二〇二三・五））を参考されたい。

前掲拙稿では、匂宮、総角、早蕨、宿木巻に見える紀州家本の特徴的な異文を数例紹介したが、「^(註)日本文学大系校本」を通して若菜上巻から夢浮橋巻までの本文を見るに、紀州家



「日本文学大系校本」表紙識語



書入の例（宿木巻）

本には、類似する文字の誤記、行の目移りなどの物理的要因によって生じたとは考えられない、極めて興味深い異文がさらに散見されるので、ここにあらためて取り上げたい。

二 紀州家本宿木卷冒頭部分の異文

紀州家本宿木卷の前半部分^③は、山岸が青表紙本や河内本とは異なった本文の好例として著書や論文に引いているように^④、一般に知られる宿木卷の本文とは大きく異なったものとなっている。特に次に示す宿木卷冒頭部分のうち、傍線部①～④の異文は、その用語や表現の点において興味深い問題を示している。まず、現在通行の青表紙本の本文を掲げ、その次に紀州家本の異文を示す。

その頃藤壺と聞きこゆるは、故左大臣殿の女御になむおはしける。まだ春宮と聞きこえさせし時、人よりさきに参加給〔ひ〕にしかば、①睦ましくあはれなるかたの御思ひは、ことにものし給〔ふ〕めれど、そのしるしと見ゆるふしもなくて年経給ふに、中宮には、宮たちさへあまた、こゝら大人び給ふめるに、さやうの事も少なくて、たゞ女宮一所をぞ持ち奉り給へりける。②我がいと口惜

しく、人におされ奉りぬる宿世、嘆かしくおぼゆるかはりに、この宮をだに、いかで行く末の心も慰むばかりにて見奉らむと、かしづき聞〔こ〕え給ふ事おろかならず。御容貌もいとをかくしおはすれば、帝もらうたきものに思ひ聞こえさせ給へり。女一の宮を、世にたぐひなきものにかしづき聞〔こ〕えさせ給〔ふ〕に、おほかたの世のおほえこそ及ぶべうもあらね、内々の御有様はをさしく劣らず。父大臣の御勢いかめしかりし名残、いたくおとろへねば、ことに心もとなき事などなくて、さぶらふ人々のなり姿よりはじめ、たゆみなく、時々につけつ、と、のへ好み、今めかしくゆゑしくさまにもてなし給へり。

③ 十四になり給ふ年、御裳着せ奉り給はむとて、春よりうちはじめて、異事なく思しいそぎて、何事もなべてならぬさまにと思し設く。古より伝はりたりける宝物ども、この折にこそはとさがし出でつ、いみじくいとなみ給〔ふ〕に、女御、夏頃、もの、けにわづらひ給〔ひ〕て、いとほかなく亡せ給〔ひ〕ぬ。④言ふかひなく口惜しき事を、内裏にも思し嘆く。心ばへ情々しく、なつかしきところおはしつる御方なれば、殿上人どもも、

「こよなくさうぐしかるべきわざかな」と、惜しみ聞
こゆ。おほかたさるまじき際の女官などまで、しのび聞
こえぬはなし。⁽⁵⁾ (青表紙本)

例えば、

① 藤壺女御に対する今上帝の心情。

睦まじうあはれなるものにおほされ給ひて、⁽⁶⁾

(紀州家本)

睦まじくあはれなるかたの御思ひは

(青表紙本)

多くの伝本においては、帝の「御思ひ」が「睦まじくあはれ
なるかたの御思ひ」という連体修飾の形で示されているが、
紀州家本は、帝が女御をどのように「おほされ給」うたのか、
その心中を「睦まじうあはれなるもの」という連用修飾に
よって説明を加える形になっている。

② 女二の宮を盛り立てるのに苦心する藤壺女御の様子。

人に壓され奉りにたるうればし慰むばかりいかで、こ
の宮をもてなし聞えむとおほしはげみて今めかしう故々
しきさまにもてなしかしづき聞え給ふ。⁽⁷⁾ (紀州家本)

我がいと口惜しく、人におされ奉りぬる宿世、嘆かしく
おほゆるかはりに、この宮をだに、いかで行く末の心も
慰(なぐさ)むばかりにて見奉らむと、かしづき聞

「こ」え給ふ事おろかならず。

(青表紙本)

紀州家本と他本とでは文章の構成も少しく異なるが、紀州家
本においては、女御が宮の養育に熱心に努める様を書く部分
に「もてなす」が二箇所にも重出している。⁽⁸⁾

③ 女二の宮の裳着。

十四になり給ふ年、御裳着のいそぎを、春よりうちはじ
めて、いみじう思し設く。古の宝物、世々の伝り物をこ
の折にと捜し出で営み給ふに、

(紀州家本)

十四になり給ふ年、御裳着せ奉り給はむとて、春よりう
ちはじめて、異事なく思しいそぎて、何事もなべてなら
ぬさまにと思し設く。古より伝はりたりける宝物ども、
この折にこそはとさがし出でつ、いみじくいとなみ給
「こ」に

(青表紙本)

紀州家本は、他本が「古より伝はりたりける宝物ども」とだ
け記すのに対して、「古の宝物、世々の伝り物」というよう
に、儀礼を彩る宝物を列挙して記す。⁽⁹⁾

④ 藤壺女御の死を嘆く今上帝とその周囲の人々の動静。

いふかひなく口惜しき事を、上にもおほし嘆く。うちわ
たりの人惜しみ悲しまぬ人なく忍び奉る。なつかしう今
めかしう情ある心さまにぞおはしければ、「こよなうさ

うぐしうもあるべきかな」と、さしもあるまじき、公
人などまでもなげきあへり。
(紀州家本)

言ふかひなく口惜しき事を、内裏にも思し嘆く。心ばへ
情々しく、なつかしきところおはしつる御方なれば、

殿上人どもも、「こよなくさうぐしかるべきわざか
な」と、惜しみ聞こゆ。おほかたさるまじき際の女官な
どまで、しのび聞こえぬはなし。
(青表紙本)

人々の悲嘆の様に記す点において、紀州家本は他本と大
きく異ならない。しかし、紀州家本と他本との間には、帝に
次いで悲しむ人々について、「うちわたりの人」「公人」と
「殿上人ども」「女官」という異同がある。また、文末を「な
げきあへり」と結ぶのも紀州家本の特徴であると言えよう。

三 宿木巻と桐壺巻

かかる紀州家本の異文は、どうして生まれたのであろうか。
それには桐壺巻の本文が大きく関わっているものと考えら
れる。と言うのも、前掲の異文に似た語句や表現を有する本
文が、桐壺巻に散見されるからである。それら桐壺巻の本文
が、紀州家本宿木巻の異文の発生に影響を及ぼした蓋然性が

あるではないかと思われる。

①④の異文に類似する桐壺巻の本文を順に挙げれば、次
の通りである。

①桐壺更衣に対する桐壺帝の心情。

いよぐあかずあはれなるものに思ほして、(青表紙本)

②女手ひとつで桐壺更衣を盛り立てる母北の方について。

父の大納言は亡くなりて、母北の方なん、古のよしある

にて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかな

る御方々にもいたう劣らず、何事の儀式をもてなし給

ひけれど、とりたて、はかぐしき後見しなければ、事

ある時は、なほより所なく心細げなり。
(青表紙本)

③光源氏の袴着と元服。

この御子三つになり給(ふ)年、御袴着のこと、一の

宮の奉りしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くして、い

みじうせさせ給(ふ)。
(青表紙本)

十二にて御元服し給ふ。居起ち思しいとなみて、限りあ

る事に事を添へさせ給(ふ)。一年の春宮の御元服、南

殿にてありし儀式、よそほしかりし御ひびきにおとさせ

給はず、所々の饗など、内蔵寮、穀倉院など、おほやけ

ごとにつかうまつれる、おろそかなることとぞと、とり

わき仰せ言ありて、きよらを尽くしてつかうまつれり。

(青表紙本)

④ 桐壺更衣の死後、その死を悲しむ人々の様子。

これにつけても憎み給ふ人々多かり。物思ひ知り給

〔ふ〕は、さま容貌などのめでたかりし事、心ばせのな
だらかにめやすく憎み難かりしことなど、今ぞ思し出づ
る。さま悪しき御もてなし故こそ、すげなう嫉み給

〔ひ〕しか、人柄のあはれに情ありし御心を、上の女房
なども恋ひ偲びあへり。なくてぞ、とは、かゝる折にや
と見えたり。

(青表紙本)

①は「あはれなるものに」という文言が、紀州家本宿木巻に
そのまま一致する。②には、紀州家本宿木巻に同じく「もて
なし」という語が見える。③は「内蔵寮、納殿の物を尽くし
て」「所々の饗など、内蔵寮、穀倉院など」というように、
儀礼を催すための財貨を列挙して記す点が同じい。④は「物
思ひ知り給〔ふ〕は」「上の女房なども」と順を追って人々
の悲嘆の様を記す点が類似する。また、「なげきあへり」と
「恋ひ偲びあへり」とは、「…あへり」という同趣の叙述とな
っている。紀州家本の異文の発生には、これらに影響された
蓋然性が考えられる。

無論、①～④に似た用語や表現は、桐壺巻に限らず『源氏
物語』の他の箇所にも少なからず見出すことができ、言わば
『源氏物語』特有の類型的表現でもある。①～④の順で一例
ずつ挙げれば、

① 陸ましようあはれに心やすく思ほし、(青表紙本総合巻)

② おほかたには、いとあらまほしくもてなしかしづき聞こ
えて、(同柏木巻)

③ 御裳着のこと思しいそぐ御心おきて、世の常ならず。

(中略) 近き御しつらひのものの覆、敷物、茵などの端
どもに、故院の御世のはじめつかた、高麗人の奉れりけ

る綾、緋金錦どもなど、今の世のものに似ず、なほさま

々御覧じあてつ、せさせ給〔ひ〕て、このたびの綾、

羅などは、人々に賜はず。(同梅枝巻)

④ 祖父大臣、いと急にさがなくおはして、その御ま、にな

りなむ世を、いかならむと、上達部、殿上人みな思ひ喚

く。中宮、大将殿などは、ましてすぐれてものも思しわ

かれず、(中略) 理ながら、いとあはれに、世人も見

奉る。(同賢木巻)

しかし、異文発生の要因が桐壺巻に求められると考えるのに
は理由がある。それは宿木巻の冒頭部分と桐壺巻のプロット

の類似である。¹³⁾類似すると言うのは、次の諸点においてである。

- (1) 帝寵厚い妃の存在。(桐壺更衣／藤壺女御)
- (2) 前記(1)の妃が帝との間に、類稀なる美貌の一子を儲ける。(光源氏／女二の宮)
- (3) 前記(2)の子の通過儀礼が盛大に執り行われる。(袴着・元服／裳着)
- (4) 夏、前記(1)の妃が失意のうちに世を去る。(但し(3)との順序は、桐壺巻と宿木巻とで前後する。)

宿木巻の冒頭部分は展開、叙述とも、まるで桐壺巻を粉本にして書かれたかのような一段であったのである。

また、登場する妃の呼称が「藤壺女御」であることも、桐壺巻に登場する桐壺帝の妃、「藤壺」を彷彿とさせよう。本文についても、冒頭第二文の「まだ春宮と聞こえさせし時人よりさきに参り給(ひ)にしかば」(紀州家本「まだ東宮と聞えし時より、人前に参り給ひにしかば」とある部分は、桐壺帝の弘徽殿女御に対する思いの内を記す一文、「人より先に参り給(ひ)て、やむごとなき御思ひなべてならず」というのに似る。

『源氏物語』の愛読者ならば、当該部分と桐壺巻との類似

を感じつつ宿木巻を読んだのではないであろうか。そして紀州家本の写し手¹⁴⁾もまた、今上帝、藤壺女御、女二の宮の各人に、桐壺帝、桐壺更衣、光源氏の面影を重ねて読んだことと思われる。とすれば、書写の際に、筆が差し掛かった箇所、情況が類似する桐壺巻の記事が写し手の脳裏に思い浮かび、それとの混同で紀州家本に異文が生まれたと考えることができる。

四 書写における記憶の再生と異文

写し手の脳中に呼び起された桐壺巻が大きく影響して生まれたと考えられる異文が、②～④である。

例えば②。

人に壓され奉りにたるうればし慰むばかりいかで、この宮をもてなし聞えむとおぼしはげみて今めかしう故々しきさまにもてなしかしづき聞え給ふ。(紀州家本)

他本と較べたとき、紀州家本には二箇所「もてなし」の混入が考えられる。この「もてなし」については、桐壺巻、桐壺更衣を盛り立てるのに腐心する母北の方を書いた箇所に見える「もてなし」が入り込んだものであったのではないか。

父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、古のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々にもいたう劣らず、何事の儀式をもてなし給ひけれど、とりたて、はかなくしき後見しなければ、事ある時は、なほより所なく心細げなり。(青表紙本)

宿木巻と桐壺巻とはいずれも、愛嬢(女二の宮/桐壺更衣)に尽くす母(藤壺女御/北の方)の姿を書いている。娘が中宮腹の御子たち、または他の妃たちに劣らぬよう努める二人の姿には重なるものがある。紀州家本の写し手においても、二人が重なって脳裏に右の桐壺巻の記事が浮かび上がったのではないか。そして勢い女二の宮を大切に扱う女御の様について、北の方について言う「もてなし」という文言を書き加えてしまったのではないだろうか。僅か一文の中に二度重出するところに、「もてなし」と書かずにはいられない写し手の思い入れとも言えるものを感じ取ることができよう。

次に③。

十四になり給ふ年、御裳著のいそぎを、春よりうちはじめ、いみじう思し設く。古の宝物、世々の伝り物をこの折にと捜し出で営み給ふに、(紀州家本)

他本が「古より伝はりたりける宝物ども」とだけ記すのに対

して、「古の宝物、世々の伝り物」という、儀礼に用いられる宝物を列挙して記す形が紀州家本の特徴である。これは次に示す、光源氏の袴着、元服の記事の本文に影響を受けて成ったものではなからうか。

この御子三つになり給(ふ)年、御袴着のこと、一の宮の奉りしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くして、いみじうせさせ給(ふ)。(青表紙本)

十二にて御元服し給ふ。居立ち思しいとなみて、限りある事に事を添へさせ給(ふ)。一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式、よそはしかりし御ひゞきにおとさせ給はず、所々の饗など、内蔵寮、穀倉院など、おほやけごとにつかうまつれる、おろそかなることとぞと、とりわき仰せ言ありて、きよらを尽くしてつかうまつれり。

(青表紙本)

宿木巻は裳着、桐壺巻は袴着と元服。二巻は通過儀礼を書くという点において共通している。『源氏物語』には、明石の姫君の袴着(薄雲巻)、玉鬘の裳着(行幸巻)、明石の姫君の裳着(梅枝巻)についての記事もあるが、それら三巻には儀礼に用いる宝物の数々は列記されていない。写し手においては、筆が女二の宮の裳着についての記述に差し掛かったとき、

その脳裏には右の場面が思い起こされたことであろう。そして盛儀の程を書くのに、財宝や財貨を列記する桐壺巻の本文に誘引されて、右のような本文を書いてしまったと考えられる。

さらに④。

いふかひなく口惜しき事を、上にもおぼし歎く。うちわたりの人惜しみ悲しまぬ人なく忍び奉る。なつかしう今めかしう情ある心ざまにぞおはしければ、「こよなうさう／＼しうもあるべきかな」と、さしもあるまじき、公人などまでもなげきあへり。

(紀州家本)

紀州家本は藤壺女御の死を悲しむ人々を「上」、「うちわたりの人」、「公人」と記す。それに対応する箇所は、多くの伝本においては「内裏」、「殿上人」、「女官」という本文になっており、紀州家本と他本との間には、帝以下の人々に異同が見られる。紀州家本の写し手は何故、「うちわたりの人」、「公人」と写したのか。その理由を考える上では、次の桐壺巻の記事に注目すべきであろう。

これにつけても憎み給ふ人々多かり。物思ひ知り給〔ふ〕は、さま容貌などのめでたかりし事、心ばせのなだらかにめやすく憎み難かりしことなど、今ぞ思し出づ

る。さま悪しき御もてなし故こそ、すげなう嫉み給〔ひ〕しか、人柄のあはれに情ありし御心を、上の女房なども恋ひ惚びあへり。なくてぞ、とは、かゝる折にやと見えたり。

(青表紙本)

④と当該箇所とは、愛妃歿後の帝とその周囲の人々の悲嘆の様を書くという点で一致する。この直前、悲しみに昏れる桐壺帝は、生前に女御昇進を果たし得なかつたとして、更衣に三位を追贈する。帝が亡くなった更衣を今もなお偏愛することについて批難する人がいる一方で、帝と心を同じくし、更衣を偲ぶ人もあった。すなわち、「物思ひ知り給〔ふ〕」と「上の女房」である。「物思ひ知り給〔ふ〕」については諸注物の道理を弁えている人、という意と取る。もう一方の「上の女房」は帝付きの女房たちである。帝とともに「上の女房」たちも更衣の死を悼んでいたのである。

桐壺巻においては、帝が更衣のことを想うとき、そこにはいつも帝に寄り添う女房の姿があった。

更衣の忘れ形見である幼い光源氏を恋しく想うとき。

一の宮を見奉らせ給〔ふ〕にも、若宮の御恋しさのみ思はし出でつゝ、親しき女房、御乳母などを遣はしつづつ、有様を聞こしめす。

(青表紙本)

更衣の弔問より帰参した鞆負命婦復命の場。

御前の壺前裁の、いとおもしろき盛りなるを、御覧するやうにて、忍びやかに、心にくき限りの女房四五人さぶらはせ給〔ひ〕て、御物語せさせ給〔ふ〕なりけり。

(青表紙本)

女房たちはいつも帝の側近くにあつて、哀感漂う帝を傷ましく拝していた。時に帝と在りし日の更衣の思い出などを語り、その悲しみを分かち合っていたこれらは、帝付きの女房すなわち「上の女房」であつたらう。桐壺巻に見えるかか帝と女房たちの在り方を、恐らく紀州家本の写し手は熟知していた。それ故に、藤壺女御の死を悲嘆する人々の様を写すときに、脳中に思い起こされた桐壺巻に照らして、「上」の次には、帝の側近くに仕える女房と思われる「うちわたりの人」を書いたのではなからうか。その次に見える「公人」という語は「源氏物語」において、男女の別、官職、位階を問わず用いられているため、具体的にどのような人物であるのか判然としない。しかし、次に掲げた柏木巻末部分に「さしもあるまじき公人」(破線部)という、全く同じ文言を見ることが出来る。柏木巻も桐壺、宿木の二巻に同じく、帝が寵愛していた人物の歿後の人々の動静を記していることから、

同じように写し手の中で記憶の混同が生じ、柏木巻の文言が混入したものであつた蓋然性がある。

また、「公人」の嘆く様を「なげきあへり」と記すところは、「上の女房なども恋ひ惚びあへり」と同じ「:あへり」という書き方であり、④の異文が前掲の桐壺巻の一節の影響を受けて成つたものであると考える、一つの傍証となり得るのではなからうか。

こうした異文生成の機制を見て取れる例文を、紀州家本柏木巻にも見ることが出来る。

心乱るやうなりし世〔の〕中に、高きも下れるも、惜しみあたらしがらぬはなきも、むべしき方をばさるものにて、あやしう情を立てたる人にぞものし給〔ひ〕ければ、さしもあるまじき公人、女房などの年古めきたるどもさへ、恋ひ悲しび聞こゆる。まして上には、御遊びなどの折ごとにも、まづ思し出でてなむ、思はせ給〔ひ〕ける。「あはれ衛門の督」といふ言種、何ごとにつけても言はぬ人なし。六条の院には、ましてあはれと思し出づること、月日に添へて多かり。

(青表紙本)

柏木巻末部分は柏木歿後の人々の動静を記す。親友であつた夕霧をはじめ、「さしもあるまじき公人」、「女房」、「上」す

なわち冷泉帝、そして「六条の院」すなわち光源氏などの人々が柏木の死を慨嘆し、その人柄を偲ぶ。ここで注目したのは、傍線を引いた「あやしう情を立てたる人にぞ」について、紀州家本を始め、保坂本、国冬本、天理図書館蔵伝源頼政筆柏木巻においては、「あやしう」と「情」の間に、「なつかしう」（伝頼政筆本「なつかしく」）が書き加えられた形の本文となっている点である。これはいかなる理由によるものか。寵臣と寵妃の違いはあるが、その死を様々な人々が悲しむという点において、柏木巻の当該部分も、④との類似を指摘した桐壺巻、更衣歿後の記事に似ていることに気が付く。また、その叙述も「御遊びなどの折ごとにも、まづ思し出でてなむ」とあるところなどは、桐壺帝が更衣と興じたかつての観月の宴を回想する部分、「かうやうの折は、御遊びなどせさせ給（ひ）しに」を彷彿とさせる。

そこで桐壺巻を思い起こすに、この「なつかし」という語が桐壺更衣の魅力を表す重要な語であったことに思い至る。

絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師と言へども、筆限りありければ、いとほひ少なし。太液（の）芙蓉、未央（の）柳も、げに通ひたりし容貌を、唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげな

りしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。
（青表紙本）

命婦の復命を受ける桐壺帝は「絵に描ける楊貴妃」を眺め、貴妃の絵姿に彼女とは対照的な更衣の面影を見出し、その音容を偲んでいた。貴妃について言う、「うるはしうこそありけめ」といふことばは、そのかげに、「うるはし」の反対面である、曲線的なしなやかさ、やさしさに欠ける処があり、あまりにきつとして親しみにくい所があつたといふ意がこもつてゐる」（北山谿太『源氏物語の新研究』（立志社書房、一九五一）。これに対して、更衣の人柄を形容する「なつかし」という語は、本居宣長『源氏物語玉の小櫛』が言うように、

なつかしう同 すべて此詞は、なつくといふ詞をはたらかしたるにて、やはらかにしたしくむつましく思はる、意也、俗にいふ意とはや、異也。¹⁹⁾

「なつかし」は、「やはらかにしたしくむつましく思はる、」人物を形容する特徴的な語であつた。柏木についても、多くの人々にその死を悼まれ、その人柄が偲ばれるという点が更衣と共通することから、連想が働いたのではなからうか。それによって、柏木巻末部分を写す写し手の脳裏に右の更衣歿

後の記事が浮かび、更衣同様非業の死を遂げた柏木の人柄について、「なつかしう」と書き加えてしまったのではなからうか。柏木については、巻中他に「なつかし」と言われていないにも関わらず、ここにも「なつかし」が見えることも、このことを裏付けるものと思われる。

如上の異文は、いずれも類似する文字との誤記、行の目移りなどと言った物理的要因によって生じたものではなく、写し手が『源氏物語』の愛読者であったがために生まれた異文であると考えられる。

かつて人々の『源氏物語』愛好が、現代の我々の想像を凌駕する程のものであったことは、『更級日記』の作者が『源氏物語』耽読の末、その本文が「をのづからなどは、諳におぼえ浮かぶ」ようになったと述懐していることから窺い知ることができる。『源氏物語』五十四帖の首巻にして、『無名草子』に「桐壺に過ぎたる巻やは侍るべき」と謳われた桐壺巻²⁴であれば、その本文は読者の記憶に強く残り、容易く思い出せるものであったに違いない。愛読者が宿木巻を読めば、プロットが類似する桐壺巻の記憶が甦ったことであろう。

かかる『源氏物語』の愛読者が書写に及べば、桐壺巻の記

憶が当然脳中に現れる。『源氏物語』の愛読者であったと思われる紀州家本の写し手においても、宿木巻を書写するとき、状況が類似する桐壺巻の本文が思い起こされたことであろう。脳中に浮かび上がった別の箇所本文を契機として、それと混同した本文、あるいはそこに見える語句を書き記してしまうということは、ままあったのではないか。そしてその書写行為の前提には、物語の世界を読みながら辿るといふ、読書の行為があったと考えるべきであろう。

五 読書の再体験としての書写

書写において、筆が差し掛かった箇所に状況が類似する物語の文言が、次々と写し手の脳中に甦るとすれば、書写は読書にも等しい様相を呈する行為であった、と言うことができる。単に記憶の混同が起こることではなく、そこには、書写に先立って読者における作品の言語の再生という現象が起きている。

写し手が『源氏物語』の愛読者であったが故に異文が生まれる、ということがあるとすれば、①もその例の一つに数えられよう。

睦まじうあはれなるものにおぼされ給ひて、(紀州家本)

藤壺女御に対する今上帝の心情を書く。他本は、

睦まじくあはれなるかたの御思ひは、 (青表紙本)

という本文であり、紀州家本と他本との間には「あはれなる」以下に異同が見える。紀州家本の異文は一読してわかるように、前掲①桐壺巻の、

いよ／＼あかずあはれなるものにおもほして (青表紙本)

に酷似する。こちら桐壺更衣に対する桐壺帝の愛情を書いており、宿木巻の「あはれなる」を写す写し手の脳裏にこの桐壺巻の本文が浮かび上がり、それに誘引されて、「あはれなるものにおぼされ給ひて」と書いてしまった、という経緯がひとまず考えられる。

しかし、紀州家本と他本とを較べるとき、その本文には質的な差が浮かび上がる。すなわち、紀州家本は、帝が女御のことをどのように「おぼされ給」うたのか、その内容を「睦まじうあはれなるもの」という連用修飾によって表現した形になっている。このような「思ふ」を連用修飾する形の文は、その連用修飾の部分が「心意の作用即ち思考判断の意味」を表わすものとされる(時枝誠記『増訂版 古典解釈のための日本文法』〔至文堂、一九五九〕)。それに言わゆる指

定の助動詞「に」⁽²⁶⁾が伴うことで、それは「帝は女御のことを」睦まじうあはれなるものであるとお思いになって」という意となる。従って紀州家本は、地の文でありながら、帝の

心情を吐露するかのように表していると言うことができる。⁽²⁷⁾これに対して青表紙本は、帝の「御思ひ」が「睦まじくあは

れなるかたの御思ひ」という連体修飾の形で示されている。これは女御に対する帝の「御思ひ」が「睦まじくあはれな

り」という方向にあるということを客観的な説明として加えているだけであり、帝の心情を直截的に表わすものではない。この点において他本は、紀州家本に比して概念的な説明に止

まったものであると言うことができよう。

かかる質的な差異から、①の異文は、記憶の中の桐壺巻に誘引されて生まれたものというよりはむしろ、写し手が作中の帝に共感したことで生まれたものであった蓋然性があるのではないかと考える。ここには元本の文字を写す以前に、作品の再読ということが起きている。

恐らくこの写し手は、女御のことを「睦まじくあはれ」と思うに至るまでの帝の心情を辿っていた。藤壺女御の入内は帝がまだ東宮の時分のこと、梅枝巻に「左大臣殿(の)三の君参り給(ひ)ぬ。麗景殿と聞こゆ」と記される。その後、

東宮は踐祚し、女御は麗景殿から藤壺に移った。しかし、後ろ盾であった父左大臣が世を去り（この点も、藤壺女御と桐壺更衣とは境遇が似る）、明石の姫君が中宮に冊立されたことによつて、女御は不如意の日々を送らざるを得なくなつた。中宮に圧倒されたとは言え、女御には帝との間に育まれた愛情があつたことであろう。帝は父大臣の死によつて政治の世界とは縁遠くなつた女御とは気が置けない仲であつたろうし、また、不遇を託つこととなつた女御を憐れむ気持ちもあつたことであろう。写し手は恰も自身が帝になつたかの如く、物語の世界を追体験しつゝ「睦まじうあはれなるもの」という帝の心情を辿つていたのではないか。そして、それが書写の際にまた現れて来て、「睦まじくあはれなるかたの御思ひは」という説明的な本文ではなく、より直截的に情意を吐露する口吻、すなわち「睦まじうあはれなるものにおぼされ給ひて」と書いてしまつたのではなからうか。書写にあつては、その前提として作品の再読、そして言わば、その再体験という読書の行為があつたものと考えられる。

抑々かつての人々は、『源氏物語』をどのように読んでいたのか。『源氏物語』の叙述は、単なる描写に終わるものではない。同時にそこには様々の情意が託されるのである」

（上野英二「物語の言語行為―源氏の物がたり―」、『源氏物語序説』（平凡社、一九九五）所収）とされる。「様々な情意が託される」叙述、それは読者の感情移入を促し、物語を追体験させるものとなるであろう。作中人物の思惟や台詞は主観性が強く、特に読者の共感を呼ぶ余地が多分にあると言えよう。とすれば、それを書写する際も、そうした感情移入を伴つた物語世界の追体験の、そのさらなる再体験がなされたことであろう。

そうした思い入れが異文を生むこともあつたであろう。それが窺える例も紀州家本宿木巻に見ることができる。夫である匂宮のもとに夕霧の息女六の君が嫁すことが決まり、懊悩する中の君の心中を記す部分。

二条（の）院の対の御方には、聞き給（ふ）に、さればよ、いかでかは、数ならぬありさまなれば、かならず人笑へに憂きこと出で来むものぞ、（中略）目に近くては、ことにつらげなることも見えず、あはれに深き契りをのみし給へるを、にはかにかはり給（は）む程、いかゞはやすき心地はすべからむ、

（青表紙本）

傍線を引いた「にはかにかはり給（は）む程」に相当する部分が、紀州家本においては、

俄にたゞならずも覺ゆべきかな

という「かな」による感嘆文となっている。写し手は物語の世界を追体験し、匂宮との将来を悲観する中の君に思いを寄せたと思われる。それが書写する際にも再体験される。そして、それが文字として定着してしまふ。「俄にたゞならずも覺ゆべきかな」。この感嘆は六の君が嫁した後、匂宮の心変わりや惧れる中の君に共感し、彼女の如く匂宮との前途を悲観する写し手が洩らした感嘆であつたのではないか。

写し手が読書の再体験とも言える書写の行為の中で生んだと思われる本文は、紀州家本だけに限らない。

上野英二「はかもなき鳥の跡とは思ふとも―源氏物語を書くこと―」（前掲書所収）は、「源氏物語」を『源氏物語』たらしめようとする熱意のあまりに、かえつてその本文を損ねる結果を将来してしまつた例」として、次の青表紙本夕顔巻、「なにがしの院」に一夜を過ごした光源氏の印象を記す箇所に見える、「いとけうとけになりける所かな」を挙げ

ひたたくるほどに起き給（ひ）て、格子手づから上げ給ふ。
いといたく荒れて、人目もなく遙々と見たされて、木
立いと疎ましくものふりたり。け近き草木などは、こと

に見所なく、みな秋の野らにて、池も水草に埋もれたれ
ば、いとけうとけになりける所かな。別納のかたにぞ、
曹司などして、人住むべかめれど、こなたは離れたり。
「けうとくもなりにける所かな。さりとも鬼なども、わ
れをば見許してむ」とのたまふ。

通常『源氏物語』において、地の文に「かな」が用いられることはないことから、古来、直後に見える破線部「けうとくもなりにける所かな」との目移りによる誤写と考えられていたが、同論文は「もう少し写し手の意識にかかわつての誤写」と考え、「後出の文言の先取りと考えた方が実情に近いであろう」とする。と同時に、この感嘆について「物語の世界をさながら我が身の上のことと感じて、作中の光源氏の心情に同化する、この写し手の洩らす感嘆ではなかつたらうか」と言う。

同論文はまた、次に掲げる陽明文庫本桐壺巻の異文にも類似した現象のあつたことを見出している。

冒頭近く、桐壺帝の桐壺更衣への偏愛を批難する周囲の人々を記す部分。

上達部、上人なども、あいなう目を側めつゝ、いとまば
ゆき人の御おぼえかな、もろこしにもかゝる事の起りに

こそ、世は乱れ、悪しきことも出来けれ、とても悩むほどに、
(二ウ)

あるいは更衣死後の桐壺帝の悲嘆の様を記す部分。

すべて近く候ふ限りは、男女いみじきわざかな、と言ひ合はせつ、嘆く、さるべきにこそおはしますらめ、多くの人の譏り恨みを憚らせ給はず、この御方にかたよいたる事は、道理を失はせ給〔ひ〕しに、今はかく世の政をも思し召し捨てたるやうになりゆくは、いとたえなくしきわざかな、人の朝廷の例かき集め、さ、めき嘆きけり。
(一九ウ〜二〇オ)

二例とも傍線を引いた部分が、地の文でありながら「かな」を使った感嘆文となっており、『源氏物語』の文章上、自然であると言わざるを得ない。これらについて同論文は、類似する情況の感嘆文、あるいは近接する感嘆文、すなわち「人の御おほえかな」(九ウ)、「男女いみじきわざかな」(前掲引用破線部)に引かれて成った蓋然性を指摘する。同時にこれらの感嘆は、その主体たる作中人物に同化した写し手が「作中の人々とともに自らの慨嘆の気持を表わしたのだ」と解釈する。そしてこれらの例から、写し手の「かな」を用いた詠嘆への欲求とも言うべきものを見出し、書写という行為

について「書写する作業とは、そう書きたいという、止むに止まれぬ内的な欲求によつて駆り立てられたものであつたらしい」という見解を示している。

『源氏物語』の読者は、『源氏物語』を読むとき、語り手を介して作中人物に感情移入して同化するという、言わば、「作中人物の生を我が物とすることに等しい」(上野前掲論文「物語の言語行為」)読み方をしていたと思われる。『源氏物語』の読者にとつて『源氏物語』を読むこととは、単に文字を目で追い、物語の流れを理解するという程度の行為ではない。物語の世界を追体験しつつ作中の人物に同化し、まるで我が身の上の事の如く、作中の出来事に情意を動かすという、積極的に物語に関わる行為であつたと考えられる。

殊に本稿で宿木巻との関係性を指摘した桐壺巻は、作中人物の心理描写が緻密であり、まるで物語の世界が顕現するかのような、現実感ある叙述で構成されていることについては以前指摘した(拙稿「物語の現実感―源氏物語の世界構築について―」、『成城国文学』三四(二〇一八・三))。そうした現実感が読者の情意を刺激する。作中の情意を我が物とする読者にとつて『源氏物語』の世界は、そこに情意が生じる以上、それは最早現実等に等しい。それは書写においても繰り返

されるであろう。書写はそのような読書行為を再体験する行為であった。その行為の中で再び物語に情意が動いたとき、その思いのままに、写し手なりの『源氏物語』を書き付けてしまうこととなるのであろう。

如上の書写の機制は、『源氏物語』読書についての最古の記録である『更級日記』に窺うことができる。

源氏の五十余巻、櫃に入りながら、在中将、とほぎみ、せりかは、しらら、あさうづなどいふ物語ども、一ふくろとり入れて、得て帰る心地のうれしさぞいみじきや。

「紫のゆかりを見て、つづきの見まほしくおぼゆれど」手に入れることができず、「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せ給へ」と、神仏に願っていた『更級日記』の作者は念願の『源氏物語』を「をばなる人」から貰い受けた。書物を容易に入手できない当時において、その喜びは想像するに余りある。

はしるはしる、わづかに見つつ心も得ず、心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらざ几帳の内のうち臥して、引き出でつつ見るこち、後の位も何にかはせむ。昼は日暮らし、夜は目の覚めたるかぎり、灯を近くともしてこれを見るよりほかのことなければ、おのづか

らなどは、諳におぼえ浮かぶを、

『源氏物語』を入手し歎喜した作者は几帳の内で一人『源氏物語』に読み耽った。『源氏物語』を読んでは作中の人物に思いを寄せ、彼らに同化しつつ物語の様々な出来事に情意を動かしたことであろう。作中、「光の源氏の夕顔、宇治の大將の浮舟の女君のやうにこそあらめ」と願う作者は、夕顔と浮舟に対して強い憧れを抱き、殆ど彼女らに同化するばかりの思いの入れようであった。作者は『源氏物語』の世界を追体験しつつ読み、その世界を現実の如く感じていたのではないだろうか。そしてその結果、『更級日記』の作者は、その本文が「おのづからなどは、諳におぼえ浮かぶ」ようになったと言う。

彼女の場合、辛い写本を手に入れることができたが、もしそれが手に入らなかつたらどうであろうか。『源氏物語』を我が物として手元に置いておきたければ、それは自ら書写する他ない。抑々写本を作りたいという欲求は、それが自発的なものである限り、その作品への愛着から始まるものである⁽²⁹⁾。彼女のような熱狂的な愛読者が『源氏物語』を写したならば、その『源氏物語』はどのようなものになるであろうか。『源氏物語』の本文が「おのづからなどは、諳におぼえ浮か

ぶ」ようにもなった彼女のことであるから、状況が類似する他の箇所本文と混同し、誤った本文を書いてしまうこともあり得たであろう。また、その思い入れの強さから物語の出来事に情意が発動し、思いのままの、あるいは自分好みの『源氏物語』を書き付けてしまうということも充分に考えられるのではないか。そうして出来上がった『源氏物語』の写本はまさしく、彼女によって、彼女のために作られた、彼女お気に入りの『源氏物語』であったに違いない。本稿に見た異文は、そうした『源氏物語』の愛読者が、自らのために自ら写したものであることの痕跡を残すものではなかったろうか。

六 結語

『源氏物語』の書写においては、写し手の『源氏物語』への愛情が要因となって、元本とは異なった本文を書き付けてしまうことが屢々あったものと思われる。物語を知悉しているがための記憶の混同、あるいは作中世界への情意。これらが許される『源氏物語』の書写の行為は、さながら写し手という作者による執筆にも等しい行為であったと考えられる。

同じ書写者であっても、中世ヨーロッパの写字生、奈良時代の写経生は『源氏物語』の写し手とは性格を異にしていた。彼らは聖典や仏典の書写を神仏に通じるための聖なる行為と考え、元本を正確に写すことを第一義とし、「自身をすてて、献身する、ただそれだけであった。前にひろげられている手本、そのみが真実なる唯一のものであった。これに対しては、解釈することも、批判することもゆるされなかった」(池田亀鑑『古典学入門』(岩波書店、一九九一))。これに対して、本稿で論じたような『源氏物語』の写し手は、自身の情動のままに新たな本文を生み出してしまふ。聖典、仏典と世俗の文学との性格の違いは勿論あるが、写字生や写経生の「自身をすてて」臨む書写行為とは対照的に、『源氏物語』の書写行為には「自身」という存在の参与があったのである。禁欲的な聖典、仏典の書写とは異なり、正確であることに拘わらず、自らの思いのまま『源氏物語』を写したのである。そしてこれらの書写の行為の前提には、読書の行為があることを忘れてはならない。

校訂の時代以前の『源氏物語』においては、単に複製することを第一義とするのではなく、物語の世界を再体験しつつ写し取るという、読書の行為を前提にした大らかな書写行為

があった。朗読が単なる音声変換に留まるものではなく、情意を含んだ物語の再現であり、かつ物語世界の追体験であるように、書写もまた単なる機械的複写に終わるものではなく、情意を含んだ物語世界の再現であり、かつそれを再体験する行為であった。かかる書写は読書行為の一種として捉えることができよう。このことは『源氏物語』に限らず、世俗文学諸作品の平安期写本全般に関わる問題として敷衍して考えることもできるであろう。⁽³¹⁾

鎌倉時代以降、校訂という研究的態度が次第に一般化するが、それらの写本は、

校本云去正応四年之比、此物語一部以家本不違一字所摸也。⁽³²⁾（国文学研究資料館蔵正徹本藤原為相本奥書）

正和第三之曆大簇上弦之候、以亡父之証本不違一字終書写之功畢。⁽³³⁾（東山御文庫蔵御物本聖覚識語）

と言うように、「不違一字」を標榜して厳密な形で書承されて行く。

池田亀鑑『古典の批判的処置に関する研究 第二部』（岩波書店、一九四一）は、第三章第二節において、「書写者」と「書本」のあり方について次のように言う。

二、書写者は書本を正当に従つて純粹に転写せんとす

る意志と道徳とを持つてゐる。

書写はそれが「書写」であるためには、常に書本を離れては成立し得ない。書本と書写者とは如何なる場合でも書写の前提である。もとより、書写者と雖も人間であり、又それ故に、無意識的に誤謬を犯し、時に意識的に本文の改竄を試みることもある。しかし書写者は、本質的には自分の書写に対して、常に責任を負ふといふ道徳を堅持してゐる筈である。もしさうでない書写があるならば、それはも早や少くとも「書写」とは云へないであらう。

「書写者」も人間である以上、「書写」において「誤謬」や「本文の改竄」を犯すこともあるが、その根底には「純粹に転写せんとする意志と道徳」、そして「責任」というものがあつたはずだとする。しかし、校訂本以前の『源氏物語』の書写においては、本文の一字一句に不可侵の權威を認めていたということもなく、元本を忠実に写し取るという「責任」からは自由な書写もあり得たと思われる。そうして生まれた異文は「誤謬」や「本文の改竄」と言つて否定的に捉えられるが、写し手にとっては、それが彼らのあるべき『源氏物語』の本文であり、決して否定的に捉えられるべき

ものではなかったと考える。さらに言えば、書写の自由度は時代を遡れば遡るほど、つまり『源氏物語』成立から間も無い、言わば「別本」以前の時代においては、さらに高かったのではないかと想像される。好きな『源氏物語』を、自分好みの形にカスタマイズし、個人用の写本として愛玩する。今でこそ古典として尊重される『源氏物語』も、当時は愛玩品として自由に写されていたのではなからうか。そして『源氏物語』の多様な異文は、そうした営みの中で生まれたものであったと考えられるのではないだろうか。

本稿に見た『源氏物語』の本文には、『源氏物語』の世界を生きたが如く読み、そうして形成された自らの『源氏物語』を、読書の再体験とも言える書写行為において再現して書き付けてしまうという、往時の『源氏物語』の愛読と、それを反映した自由な書写行為を偲ぶことができるのである。

注

- (1) 紀州家本の書入校本には、「武田校本」「山岸校本」の他、室伏信助（一九三二—二〇二二）が、「武田校本」のうち桐壺卷のみを、西尾光雄『校註源氏物語桐壺』（武蔵野書院、一九四一）に写し取った「室伏校本」がある。その本文は、伊藤鉄也『桐壺』の第二次的本文資料集成―伝

阿仏尼筆本・伝慈鎮筆本・従二位麗子本・源氏釈抄本―（『源氏物語本文の研究』（おうふう・二〇〇二）所収）で知ることができる。

- (2) 『改日本文学大系 源氏物語』は、『首書源氏物語』を底本とし、萩原廣道『源氏物語評釋』と本居官長『源氏物語玉の小櫛』を以て校訂されている。

- (3) 山岸徳平『河内本源氏物語開題』は、「総角卷・早藤卷及び宿木卷の前半」に「河内本や湖月抄と極めて大きな異同」が見えると言うが、「宿木卷の前半」の具体的な範囲を示していない。しかし、『改日本文学大系校本」を見るに、夕霧詠「大空の月だに宿るわがやどに待（つ）宵過（き）て見えぬ君かな」（源氏物語大成 校異篇）一七二〇頁）辺りを境に書入が少なくなっていることから、「前半」とは、この辺りまでを言うのかと思われる。

- (4) 『河内本源氏物語開題』、「河内本源語の価値」（『文学』五一—一〇（一九三七・一〇））、「源氏物語の諸本の研究」（『国文学 解釈と教材の研究』三一五（一九五八・四））、「源氏物語の諸本」（山岸徳平他監修『源氏物語講座 八卷』（有精堂、一九七五）所収）に載る。

- (5) 『源氏物語』の本文は、基本的に『源氏物語大成 校異篇』に拠り、異文を適宜同本にて検ずる。但し陽明文庫本、天理図書館蔵伝源頼政筆柏木卷の本文については、以下の影印に拠る。陽明文庫本―『陽明叢書国書篇』（思文閣出版）、天理図書館蔵伝源頼政筆柏木卷―『天理図書

- 館善本叢書』（八木書店）。なお引用に際して、本文に対して以下の処置を施した。
- (1) 句読点と濁点を打ち、会話文には「」を施した。
- (2) 適宜表記を改めた箇所がある。その場合、もとの表記はルビで示した。
- (3) 原文において省略されている活用語尾と助詞を〔 〕で補った。
- (6) 「『註日本文学大系校本』に拠る。なお引用は以下の凡例に従う。
- (1) 書入の有様を厳密に伝えるべきであるが、煩を避けるため、底本である『註日本文学大系』の本文に書入を反映して復原した本文を掲出する。
- (2) 該本の書入筆者が、『註日本文学大系』の本文に振られたルビに対して、いかなる処置をとっているのか詳らかではないため、『註日本文学大系』に振られたルビも残したまま引用する。
- (7) 「別本」の保坂本「むつまじうあはれなるかたにおほされて」。
- (8) ②については、保坂本が全文紀州家本と同じ本文となっている。
- (9) 些少の異同があるものの、保坂本と紀州家本に殆ど同じ本文となっている。
- (10) 「別本」の阿里莫本「うへ人とも」、保坂本「うへ人」。
- (11) 河内本の御物本、七毫源氏、大島本「女みや」。なお保坂
- (12) 本は紀州家本と同じく、「おほやけひとまなげきあへり」。
- 紀州家本桐壺、宿木巻はともに、筆者が阿仏尼とされていることから、二巻の関係性を考慮しなければならぬが、原本佚亡の今、果たして二巻が同筆であるのか否か確かめることはできない。しかし、次章以降で示す異文の実例に徴するに、二巻の関係性は低いものと考ええる。
- (13) 宿木巻のプロットについては、玉上琢彌『源氏物語評釈 第十一巻』（角川書店、一九六八）が、「女宮一ところ」、母は藤壺、まったく、女三の宮と同じ条件ではないかと、女二の宮と女三の宮の人物像に重なるものがあるとし、若菜上巻との類似を指摘している。確かに、妃の名が「藤壺」であること（「その中に藤壺と聞きこえしは、先帝の源氏にぞおはしませしける」、帝が春宮の時分に入内した妃であること（「まだ坊と聞きこえさせし時参り給（ひ）て」、帝寵厚い妃であったこと（「帝も御心の中にいとほしきものには思ひ聞きこえさせ給（ひ）ながら」、妃が失意のうちに世を去ること（「世の中を恨みたるやうにて亡せ給（ひ）にし」、妃の子も帝の鍾愛を受けること（「その御腹の女三（の）宮を、あまたの御中にすぐれてかなしきものに思（ひ）かしづき聞きこえ給（ふ）」）などは、宿木巻のプロットに殆ど同じい。
- (14) とは言え、必ずしも紀州家本の写し手に限定しない。と言うのも、前掲注7、8、9、11に示した通り、紀州家本とほぼ同時期に書写されたと思われる保坂本において

も、傍線部①～④に当たる部分が紀州家本と大方同様の本文となっているからである。すなわち紀州家本と保坂本はある段階において同一の本を書写したと推測され、本稿に指摘する問題は、紀州家本と保坂本の元本の写し手に遡及する問題である蓋然性が高いと考えられる。

(15) 『源氏物語』において、「女官」という語の用例は少なく、宿木巻の他には、行幸巻と真木柱巻に一例ずつ見えるのみである。

尚侍・宮仕へする人なくては、かの所の政しどけなく、女官なども公事を仕うまつるにたづきなく、

(青表紙本行幸巻)

十一月になりぬ。神わざなどしげく、内侍所にも、事多かる頃にて、女官ども、内侍ども参りつゝ、い

まめかしう人騒がしきに、

(同真木柱巻)

「女官」について、北山谿太『源氏物語辞典』(平凡社、一九五六)は「によくわん」という読み方を示し、「禁中にて、御湯殿・御台盤所・殿・司等にて、御用をつとむる下臈の女房の称」と言う。行幸、真木柱巻に見える「女官」はいずれも、その文脈から推するに、「御用をつとむる下臈の女房」と考えて差し支えない。作者は宿木巻において、「御用をつとむる下臈の女房」たちまでもが悲しむほどであったと、女御の死が末端の人々にまで衝撃を与えるものであったことを書きたかったのではなからうか。

(16) 「物思ひ知り給(ふ)」「今ぞ思し出づる」と敬語が用いられていることから、「物思ひ知り給(ふ)」とは、他の妃たちであったと思われる。

(17) 管見の限り、『源氏物語』に「うちわたりの人」の用例はない。他の主要な作品を検するも、僅かに「うつほ物語」に一例見出せるのみである。

かくののしる御手持ちたる人もなきものを、内裏わたりの人、いかでか見むとこそすれ。

(蔵閣下巻、『新編日本古典文学全集』に拠る)

源涼の邸宅を訪うた藤原仲忠は、そこに居た女童これこそ恋歌を書き付けた文を贈る。仲忠は能筆の誉れ高く、その手蹟は「内裏わたりの人、いかでか見む」とするものであった、と言う。この「内裏わたりの人」について、『日本古典文学大系』、『朝日古典全書』、『新編日本古典文学全集』は「宮中の女房たち」とする。仲忠の文を垂涎する人物ということからも、「内裏わたりの人」が「宮中の女房たち」である蓋然性は高い。「うつほ物語」における語義をそのまま「源氏物語」に適用すべきではないが参考となる。

(18) 紀州家本では「女官」となっている。これは状況が似る宿木巻と記憶が混同した結果、混入したのか。

(19) 『本居宣長全集』(筑摩書房)に拠る。

(20) これに類似する異文がもう一例ある。渡部榮『讀撰従一位麗子本之研究』(大道社、一九三二)は、御法巻、「年月

重かき給へるを」(青表紙本)とある部分の、従一位麗子本の異文、「年月かさなればたのもしけなくいとおもやせていと」との傍線部「いとおもやせて」について、「桐壺卷二、桐壺更衣ヲ敍シテ「いとにはひやかにうつくしげなる人のいたうおもやせていとあはれとものをおもひしみながらことにいでもきこえやらず……」ト云フ部分ガ有ルガ、此ノ部分ト思ヒ合ハセラルル處ガ有ラウ」と言う。確かに御法卷は、桐壺卷に叙述も相似するところがあり、病にやつれる紫の上の描写も桐壺更衣のそれを思わせる。恐らく写し手においても、二人の姿が重なり、紫の上の病状を叙す「いとゝあえかに」を写そうとした際に、更衣の衰弱した姿を叙し、かつ「いとど」に同じく「イト」という音に始まる「いたうおもやせて」という桐壺卷の本文が脳中に浮かび、勢いそう書き付けてしまったと考えられる。

(21) 『新潮日本古典集成』に拠る。但し適宜私に表記を改めた箇所がある。

(22) しかし、『更級日記』の作者のような読みは、それ自体、『源氏物語』自身が要求するものであった。『源氏物語』は、例えば、「かの」という指示語を巧みに用いて、既に語られた物語の出来事を読者に想起させる。そうして「語り手と読者との共有の地盤、すなわち両者の思いの通じ合うところに『源氏物語』という作品は成立するので

ある。両者に共通の体験を基盤として、作品内の出来事は語り手にとつても読者にとつても、生々しく立ち上がる」(上野英二「源氏物語における読者の問題」、『源氏物語序説』(平凡社、一九九五)所収)。「源氏物語」は「語り手と読者との共有の地盤」を固めて、語り終えたことを前提にして進む。正しく読むため、あるいは深く読むためにも、『源氏物語』の読者たる者、愛読者ならばなおのこと、「すでに読み終えた部分を覚えていなければならなかった。無論、全編を讀んだなどとは到底考えられないことだが、物語を読み進める上で、物語のそここに思い到り、思い出しするくらいの物語の像はかなり色濃く記憶の中に保たれていたのではあるまいか」(上野英二「源氏物語の享受と本文―物語二百番歌合所収本文をめぐって―」、前掲書所収)。

(23) 注21に同じ。

(24) 萩原廣道『源氏物語評釋』も、「此ノ物語の筆づかひのいみじきことはいふもさらなれど、此ノ巻は初の巻なればにや、ことにいみじき所々おほし」(嘉永六年(一八五三)刊本に拠る)と言う。「此ノ巻は初の巻なればにや」と言うように、桐壺巻は首巻ということで殊に作者入魂の巻であつたに違いない。

(25) 紀州家本宿木卷冒頭部分の異文をめぐって、桐壺巻の影響を指摘したが、桐壺以外の巻の表現に影響を受けて成つたかと思われるものも見出せる。

今上帝が中宮腹の女一の宮を鍾愛する様を諸本、

世にたくひなきものにかしづき聞(こ)えさせ給

(「ふ」に、

と記すが、紀州家本は、

世に又なき物にもて思ひ聞こえさせ給ふ

とする。ここに見える「又なき物」という文言の類例は、

「源氏物語」の中でも特に名文とせられる一段(玉上
琢彌『鑑賞日本古典文学 源氏物語』(角川書店、一九
七五))である、須磨謫居の段に見える。

須磨には、いと心尽くしの秋風に、海は少し遠け
れど、行平の中納言の、閑吹き越ゆると言ひけむ浦
波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれ
なるものは、かゝる所の秋なりけり。(青表紙本)

「源氏物語五十四帖の全篇の調子と味ひとを代表するに、
先づ大体に於て遺憾なき一節かと思はれます」(島津久
基「附録 源氏物語序説」、『源氏物語講話』(中興館、
一九三二))と言われるように、名文の誉れ高い一段で
あれば、桐壺巻に等しく人々の記憶に強く残ったものと
考える。片や鍾愛の様、片や須磨初秋の情景。人事と自
然の違いはあれど、それが類ないものであると語ること
ろは同じである。当該箇所を写す写し手の脳内に右の須
磨巻の文言が思い起こされ、帝の宮に対する類ない愛情
について「又なき物に」と書いてしまった蓋然性がある。

(26) 時枝誠記『日本文法 文語篇』(岩波書店、一九五四)に

「指定の助動詞の中で、「に」は、従来、格助詞或は接続
助詞として扱われて来たものである」と説明がある。「睦
まじうあはれるものに」の「に」も一般に格助詞と解
される。

(27) 橋本治『窠変源氏物語1』(中央公論社、一九九五)も、

桐壺巻の当該箇所を「周囲を憚らず「愛しいものよ」と
思し召すそのお心は」と、「あはれるものに」に当る部
分を括弧で括り、帝の心中を吐露するかのように詠嘆で
記している。

(28) この他、「かならず人笑へに憂きこと出で来むものぞ」と
いう部分が、紀州家本では「必ず人笑へに住み憂き事出
で来ぬべきよ」となっている。「ぞ」に比して「よ」の方
が詠嘆の度合いが強く、これも中の君に共感した写し手
の感嘆が反映したものであらうと考えられる。

(29) 『清少納言枕草子』「ありがたきもの」の段には、「物語、
集など書き写すに、本に墨つけぬ。よき草子などは、い
みじう心して書けど、かならずこそきたなげになるめ
れ」(『日本古典文学大系』に拠る)とあり、清少納言が
自ら筆をとり、「物語、集など」を書写したことがわかる。
(30) 天平十六年(七四四)七月二十二日の「写疏所符」によ
れば、奈良時代の写経生には、「每一字墮取銭一文、每一
行墮取銭廿文」(『大日本古文书』に拠る)という科料が
課せられていた。

(31) 三木雅博『和漢朗詠集』古写本における佳句本文の改変

をめぐって」(『和漢朗詠集とその享受』(勉誠社、一九九五)所収)は、『和漢朗詠集』の「平安古写本」における原作漢詩本文の改変の原因について検討し、本文の改変があった佳句について、「二つの佳句が原作の詩文から抜き出され、訓読され、吟詠されることによって、原作の詩文の中で担わされていた役割から解放された、新たに平安朝の宮廷を中心とした風土の中で、生活の折々を彩るアクセサリ、気の利いたアクセントとして生き生きと口ずさまれるようになっていく」と言う。平安朝の人々においては、本文の改変という方法で「原作の詩文の中で担わされていた役割から解放」し、自分なりに改変した佳句を朗詠することもあったようである。

また、同氏「『和漢朗詠集』平安古写本における和歌本文の異同と部立の配列」(『前掲書所収』)は、『和漢朗詠集』春部の「藤」「躑躅」「款冬」歌群の本文をめぐる「粘葉本系」、「関戸本系」間の異同についても考察し、「両系統の各々において、書写者(または書写の依頼主)が個々の和歌の伝承されてきたいくつかの形の中から好みのものを選ぶ、或いは個々の和歌を各々の歌群の中でよりふさわしい形や気に入った形に改変する、ということが常套的に行われていると推測される」と言う。これによれば、『和漢朗詠集』における本文の改変は『源氏物語』に見えるそれらに比して意識的な営為であったと言える。また、一概には言えないが、「朗詠」

という性格上、替え歌のように本文を改変することもあったかもしれない。いずれにしても、愛好の結果の本文改変という点で本稿で論じた問題に通ずるところがあるう。

(32) 「人文学オープンデータ共同利用センター」の「日本古典籍データセット」(<http://codh.rois.ac.jp/pmj/book/20010454/>)にて閲覧の画像に拠る。

(33) 貴重本刊行会の複製に拠る。

〔付記〕本稿は、第六〇回表現学会全国大会(二〇二三年六月三・四日、於神奈川大学)における研究発表「源氏物語別本の文章」の発表原稿に基づき、成稿したものであり、成城大学大学院文学研究科に二〇二四年度提出の博士論文「紀州家旧蔵伝阿仏尼等筆源氏物語の研究」の一部でもある。

(なりた・だいち 成城大学大学院博士課程後期)